良寛大工を追って

―間瀬大工から生まれた船越大工―

最終回

函館は坂が多くロマンチックな街です。

この坂は美しい港から始まっています。

北海道の開拓は明治に入って、この港から広がっていきました。

そんな明治の十五～二十年頃のことだったそうです。

砂浜で大きな声をハリ上げる塊がありました。

その塊は益々大きくなるばかり。真ん中の二人の男の首にすがって泣き出す老婆の姿もありました。

二人は親子で、間瀬から手漕ぎの小さな丸木船で、津軽海峡を漂いこの浜に漂着したのでした。

丸木船は、三枚の杉板を張り合わせて造った船で、三枚ハギとも呼ばれていました。

こんな無鉄砲な本間良兵衛親子の物語が伝えられていました。

調査してみましたが、詳細はつかめませんでした。「間瀬郷土史」にこのような親子の行動は、間瀬の人情、風習の項に――冒険心、事を功す気概があり、勤勉、質素で黙々とよく働く。――と的確に表現されています。

この精神が間瀬大工の技を支えてきたのではないでしょうか。

しかし、これらの精神は、修得されたものでなく、間瀬の地形から派生した宿命であり軌跡だったのです。

そんな宿命的な軌跡を辿ってみましょう。

今から約三四〇年前（明暦）の間瀬絵図、税金を取る検地帳が現存します。（西蓮寺蔵）

本村、中村（新村）、高屋の集落が描かれ、農地は峠ごえの棚田や谷川ぞいの狭い斜面地にへばり付くように色付けされています。農地の極少さは瞭然です。

――狭い土地でひしめいて暮らす――の一言です。

当然、村人は前に広がる海に目を向けました。

輸送、保冷のない時代、市場価値の海産物は、干鰯、俵物（干しあわび、ふかひれ）だけです。

俵物を領主は督励しますが、そんなに獲れません。皆無の記録も残っています。

奇僧良寛さんは、こんな間瀬を訪れ「間瀬の浦のあまのかるものよりよりに君もとひ来よ我も待ちなん」と漁を詩っています。岩礁に付く雪海苔は大好物でした。

私たちは、この詩が、ふるさとを離れて生活している間瀬出稼大工のみなさんよ、ふるさとの海の幸のすばらしさ、そして正月にはふるさとに帰って元気な姿を見せなさいよ。みんなには、素晴らしいふるさとがあるんだよ。――と呼びかけているように思えてなりません。

間瀬大工の技はどうして発生したのでしょうか。

皇太子妃雅子さまの実家の菩提寺は新潟市の泉性寺です。

この泉性寺は大字夏井に一宇を定めていました。（寺跡が残っています。訪ねてみて下さい）間瀬、夏井の阿部姓の人々はこの寺とともに、京都広沢池畔～能登～間瀬へと移動しています。

これらから、間瀬大工堂宮技法は京都寺院建築技法が底流にあると考えられます。

しかし、彫刻技法は大胆かつ繊細で、京彫刻と比較すると、線の細さはありません。

それは、降雪という風土と間瀬大工の創意工夫による変遷でしょう。

積雪は、彫刻にもある程度の支える力を要求します。

また大工道具による彫刻では、おのずと大胆、豪快に彫らざるを得ません。おそらく彼らは、大工道具を工夫改良して彫ったものと考えられます。

抽い連載でしたが、これまで多くの叱正と情報をいただきました。

茨城大学より「船越大工」の照会をいただきました。

この集団は、船越・津雲田の庄屋、神保氏が文化政時代～明治初頭にかけて集落の二・三男に大工徒弟させ、その技術集団を結成して出稼ぎをさせたのでした。明治期に入ると、この集団は北海道に渡り永住してしまうのです。（いつか訪ねてみたいですね）

照会された神社について、見て来たような解説文を送りました。――見ないで何故分かる――そんな驚きの言葉が電話口に伝わってきました。驚くことはないのです。

この集団の弟子入り先きは、間瀬大工の棟梁家です。親方の技である間瀬大工の神社と相似形になるのは当然でしょう。

最後に、これからも間瀬大工についての学習の進展を願うとともに、祖先の労苦を偲ぶとき、間瀬海岸に良寛さんの歌碑を建立したら、どんなに素晴らしいことだろう。――出稼先で没した人々の鎮魂碑として、そしてすばらしいふるさとの発展を託して――

そんな夢を描いて、筆を置きます。

（岩室村生涯学習推進本部）

丸木船による漁の様子―明治後期頃
八幡社、学校が見える。（西蓮寺蔵）

間瀬大工のふるさと（昭和20年代）

■広報いわむろ　第四四三号　平成十一年三月一日発行（毎月一回一日発行）■発行　岩室村役場■編集　総務課■新潟県西蒲原郡岩室村大字西中八六〇（〒九五三―〇一九二）■☎〇二五六―八二―四一一一（代）■印刷　北洋印刷㈱